第16回 萬代橋フォーラム2006

活力あふれる新潟へ

「第16回萬代橋フォーラム2006」が八月二十五日、新潟市内で開かれた。現・萬代橋は一九二九（昭和四）年八月二十三日の開通から今年で七十七年の〝喜寿〟を迎えた。橋の歴史とともに地域の活力を考えるフォーラムは今回、タレントで山形弁研究家のダニエル・カール氏による「お国自慢が地域の活性化につながる」という提言を基調に、みちづくりや地域づくり、観光推進の第一線で活躍する森野美徳氏、田中カツイ氏、迫一成氏、石川雄一氏が「みちづくり ひとづくり 地域づくり」をテーマにパネル討論。全国の景観・観光事例を紹介しながら新潟の可能性を探った。

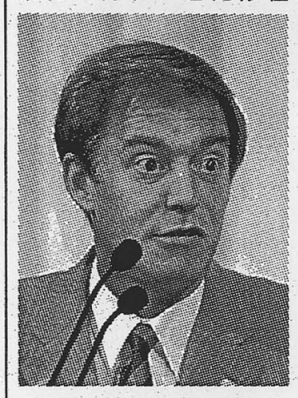
美しいまちづくり、新潟の観光力について考えたパネル討論＝8月25日、新潟市の新潟グランドホテル

主催／国土交通省新潟国道事務所・新潟県・新潟市

基調講演 オラが見た日本、ニッポン観光

山形弁研究家・タレント ダニエル・カール氏

新潟はいいとこだぁ



だにえる・かーる　60年米国出身。高校時代、奈良県に1年滞在。関西外国語大学で学び、後に佐渡の文弥人形づかいに弟子入り。卒業後、山形県内で英語教育に従事。東京で翻訳通訳サービス会社を経営。

肌に合った山形県

カリフォルニア生まれ山形育ちのダニエル・カールです。

オラの初めての日本は、交換留学生で奈良の高校に来たとき。一年目から日本が好きになってしまった。大学時代にまた来て大阪と京都で暮らし、関西弁はかりしゃべっていたオラが、今度は京都から新潟を通って佐渡島へ渡った。文弥人形・伝統芸能を研究するため浜田守太郎先生のところに半年間の弟子入り。おかげで新潟の良さもいろいろ勉強できて、地方文化の良さも分かった。その当時、新潟のまちに何回も来て、佐渡汽船乗り場からは「萬代橋」が丸見え。散歩しながら、ロマンチックな橋だな、暮らしやすいまちだな、という印象をいっぱい受けた。

カリフォルニアに戻り大学を卒業してから、今度は文部省（現・文部科学省）のあっせんで英語教師としてまた日本に。今度こそ絶対に標準語を勉強しようと思っていたのに、なぜか何と選ばれたのが、かの有名な山形。それで私の日本語が〝台無し〟になってしまった。

「寒いところだ」「雪も多いぞ」ときんさん雪がされて着いた山形。これが肌に合い、何といいところだとほれてしまった。新潟とも似ているところがいっぱいだ。

四季の変化は財産

山形も新潟も、もっと自慢していいことがある。それは四季だ。オラの故郷カリフォルニア南部は常夏の国なので「四季がねぇ。子どものころから「フォアシーズンズ（four seasons）」と聞いても全然ピンとこねぇし、見たことないから分からない。新潟の皆さんは慣れてるから気づかねぇんだ。

山形の夏はとても暑いが、秋になるとキノコ、ソバ、米などうんめぇもんがいっぱい。サトイモの芋煮会や紅葉狩りもできていい。紅葉を初めて見たときは感動した。山が真っ赤、真っ黄色、その間のオレンジ色など生まれて初めて見た自然現象、身をもって体験できたから。冬の雪も大変だけどそれが過ぎると、またいい季節が待っている。木の枝から緑の芽が出て、残雪の下からちっちゃな植物が顔を出し「新緑」という言葉が分かった。これも感動的だ。こういう、はっきりくっきりの四季の変化をもっともっと全国に、全世界に自慢したらいい。これが何よりの観光、財産になる。お国自慢は立派な美徳で、万国共通だと思う。

お国自慢のススメ

日本にはもう一つ「謙遜（ケンソン）」という美徳がある（ホワイトボードに漢字を書き、会場から大きな拍手）。礼儀作法の基本で、なくてはならないものだけど、使い過ぎるとお国自慢ができなくなる。

バカ息子、愚妻、宿六など、身内に対するこういう言葉遣いの習慣は外国にはないので、慣れるまでに四、五年かかった。日本人がお土産を渡すとき、必ず「つまらないものですが」という。最初は「エッ、なんでオラにつまらんもんを」と思ったが、これは外国人にもすぐに理解できる。謙虚や謙遜を見え見えに出してくれることに外国人は感動する。

ただし「いつでも、何でも」謙遜はいけねぇ。一線を越えると問題だ。新潟市には、新潟県には「なんもねぇ」と言ってると、そのうち日本全国に話が広がってしまう。地域は自分だけのものじゃない。地域は謙遜の中に含めてはだめ。他人の権利にまで踏み込んでしまうことになる。

そんなわけで、地域の活性化にはお国自慢が一番必要だ。「オラの町はいい」と思えばやる気も出るし、自慢心が強ければ地域の活性化、まちおこしの大成功にもつながる。そのためには、お国自慢心を、じいちゃん、ばあちゃんから親たち、お孫さんへ、上から下まで育てることが大切だな。

どうかみなさん、がんばってケラッシェ。

景観と観光

親松　まず、みちづくりとまちづくりの動きについて各地の事例などを紹介したい。

森野　今、みちと地域との関係が大きく変わり始めている。昨年から本格的に動き出した「日本風景街道（シーニック・バイウェイ・ジャパン）」の取り組みもその一つだ。「日本風景街道」は、各地の歴史や文化を生かした美しい街道空間の形成を通じて「訪れる人」と「迎える地域」の交流を拡大し、地域の再生や活性化を推進していこう という取り組み。国と地方自治体、住民がスクラムを組んで推進する仕組みで、地域とともに風景街道を育てていこうという斬新な試みだ。

石川　観光を含めて交流人口を増やすことが今後、国と地域の活力の維持と発展に欠かせない。日本から海外への旅行者は年間千七百四十万人。一方、外国からは年間六百七十三万人で、国内観光客を増やすとともに外国からの観光客もどう増やしていくかが課題。今「住んでよし、訪れてよしの国づくり」を目標に観光立国推進施策に取り組んでいる。柱の一つが〈日本ブランドの海外への戦略的発信〉。いわば日本のお国自慢のPRだ。もう一つが〈国際競争力のある観光地づくり〉。観光地としての魅力づくりが不可欠。その主役は地域に暮らす皆さん。皆さんが幸せでなければ、観光地としても長続きしないことをまず申し上げたい。

観光再生のまちづくり

「立侯武多（たちねぶた）」を復活させ、また、福島県下郷町では宿場町（大内宿）のまちなみを再生して、それぞれ観光客数を大幅に増やしている。

田中　自分の暮らしてきた運河のまち。運河埋め立ての反対運動から、運河と赤レンガ倉庫のある観光地づくりが始まった。青森県五所川原では、電線類の地中化など道路環境を整備し、伝統行事の成功例を紹介する。北海道の小樽はかつて道内開発の玄関口として栄え